アメリカと日本の子どもたちの絵本に対する反応の違いと共通性
－ストーリーテリングを通して－

元 東広島市立御薗宇小学校　教諭　　西　谷　恵美子

(1)　はじめに

私は絵本が大好きだ。子どもたちも絵本が好きである。特に低学年においては読んで貰う事を好み、興味を持って聞き入る。読み聞かせを続けた組では情緒が安定し、思いやりの心や感受性を高めることができた。絵本には、子どものみならず大人をも引きつける魅力がある。絵本を読む大人はその世界に入り込み、聞いている子どもたちは我を忘れ、話の中の主人公に同化して、一緒に悲しんだり、喜んだり……。読み手と聞き手の間に共通の空間・経験が生まれ互いを思いやれる心が高まる。

私は日本語教室（外国から入国・帰国した子どもたちに日本語を教える）で日本語を教えている。全く日本語のわからない子どもが突然やってきて、日本語を学習し始めるわけであるが、彼らはコミュニケーション手段が限られている。文字の少ない絵本を取り上げて読んでいくと、興味を持って絵を見、言葉を真似し、何度か読むうちに意味を理解していく。一つの本を媒体として想像力、表現力、思考力などを高め、総合的な学力を向上させる有益な方法だと思う。

「ねえ、ジェリー先生。次はコアラの話をしてよ。」

「私は、カモノハシの話がいいなあ。」

「２年生が英語で読んでくれた、はらぺこあおむし面白かったね。」

「スイミーを英語で読んで欲しいなあ。」

本校では、一昨年から国際理解教育の中で、コミュニケーション能力の育成の一環として英会話学習に取り組んでいる。その中でALTによる読み聞かせや、ストーリーテリングを取り入れた授業を仕組んでいる。子どもたちは英語を理解しているわけではないが、自分の知っている単語を手がかりに、あるいは話し手の動作や表情から内容を理解しながら、英語で話される物語や絵本を興味深く聞き入っている。

アメリカにおける子どもたちの読み聞かせに対する反応はどうだろうか? アメリカの子どもたちに絵本の読み聞かせをしその反応を日本の子どもたちと比べてみたい。日本の子どもたちと同じように聞いてくれるだろうか? また、アメリカでの読み聞かせはどのようになされているのか実際に見てきたい。そんな課題をもって本主題を設定した。

(2)　研究の概要

①　研究の方法

日本の絵本や昔話の紙芝居を何冊か用意し、アメリカと日本で読み聞かせをし、子どもたちの反応を比べる。読んだ後、感想を聞いたり、書いてもらったりして反応を調べる。感想を書く紙はそれぞれカットを入れ同じものを用意する。また、絵本を全て英訳し、アメリカでは英語で読むことにする。

②　選んだ本とねらい

A)『ねずみ君のチョッキ』

なかえよしを 作　上野　紀子 絵

大切なチョッキを友だちに貸してあげたねずみ君。チョッキは友だちから友だちへと貸されだんだん大きくなって、とうとう象さんまでもが着てしまう。単純な繰り返しの物語であるが、子どもたちは何度でも読んで欲しいと言って来る絵本である。貸してしまったチョッキに対して子どもたちはどんな反応を示すのかねずみ君へお手紙を書くと言うことを通して、反応を比べてみる。

B)『巨大な巨大な』

長谷川摂子 作　振矢なな 絵　（《こどものとも》傑作集）

〈巨大な巨大な○○がありました。子どもが100人やってきて○○しました。〉と言う単純な繰り返しであるが、発想の意外性に、子どもたちは興味を持つ本である。続き話を自由に考えさせることによって、子どもたちの興味関心・発想の違いを比べる。

C)『りんごが一つ』

ふくだすぐる 作・絵　（岩崎書店）

おなかをすかせた動物たちの前にりんごが一つ。猿

がつかんで逃げ出した。怒った動物たちは、一生懸命追いかける。最後、捕まえてみると小猿を胸に抱えていた。動物の鳴き声や言葉のおもしろさを感じさせながら、猿に対して、また、猿を許した動物たちについて共感するのか、どんな気持を持つのか比べてみる。

D)『ももたろう』

紙芝居（子宝社）

日本の昔話で、桃から産まれた桃太郎が村を困らせている鬼をやっつけるという話である。きび団子でパワーアップして鬼退治をすることは現代の子どもたちのゲームに似通ったところもある。桃太郎に対して子どもたちはどんなイメージを持つのだろうか。

E)『はなさき山』

斉藤隆介 作　滝平二郎 絵　（岩崎書店）

自分を犠牲にした時、誰も知らない山奥に自分だけの花がそっと咲く、と言う話で、道徳の時間に取り上げられることの多い絵本の一つである。滝平二郎の切り絵が、日本らしさをいっそう引き立てている。子どもたちはあやの行為や山姥をどう受け止めるのか知りたい。

F)『かさじぞう』

瀬田　貞二 再話　赤羽　末吉 画　（《こどものとも》傑作集）

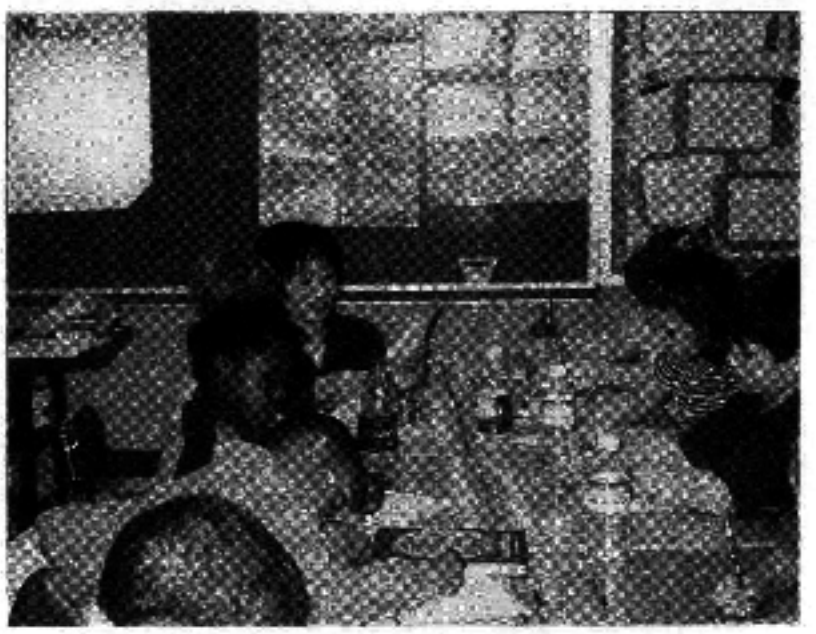
大晦日、貧しいおじいさんが、かさを作り売りに行くが全く売れない。雪の中を帰っていると、雪に埋もれた地蔵が６人。それを不憫に思ったおじいさんは売れなかったかさを被せるが、かさは５個。残りの１人には自分の手ぬぐいを脱いで被せて帰る。その夜、地蔵が米や野菜などを持ってお礼に来る。日本の民話に多いお礼に来る話である。これに対して子どもたちはどういう思いを持つのか知りたい。

③　読み聞かせの様子と子どもたちの反応

A)「ねずみ君のチョッキ」

(The Little Mouse's Waistcoat)

教室の窓際に用意されているロッキングチェアーに座って待っていると、前時の作業を終えた子どもから順に私の周りに集まってくる。自分の座る場所が決まっているようで、升目のある絨毯の上に行儀良く並んで



いく。「ねずみ君のチョッキ」と日本語で言うと不思議そうな顔をして観ている。本文は英語で読んだ。

読んだ後、「ねずみ君にお手紙を書いてあげて」と、象の鼻にぶら下がっているねずみ君の場面をカットに入れてプリントを１人１人に手渡して頼む。

担任が、「まだ手紙の書き方を教えていないわ。」とオーバーヘッドプロジェクターに手紙の書き方を指導。書き始めDear Mouse. と最後 Your friend NAME. を教える。「スペルに間違いが多いのは、まだ教えていないからだ。」と言われた。日本は一音声に一文字だから五十音を教えた１年生は自分の思いがかけるが、単語が基本の英語では、学んでない単語は書けない。フォニクスをもとに教えているのであろうか、口から出る発音に近い単語が並んでいた。

【アメリカの子どもたちの反応】

「ねずみ君、いろいろな動物が君のチョッキをのばしてしまって気の毒だったね。悪かったね。この次はもう貸しちゃだめだよ。何で貸しちゃったんだろうね。ブランコはどうだった、気持ちよかったかい。新しいチョッキを買ってあげるよ。」

「ねずみ君チョッキが伸びてしまったのは気の毒だけどブランコは気持ちよかったでしょう。」

「君のチョッキは気の毒だったね。でもぼくが新しいチョッキを買ってあげられるよ。」

「君のチョッキだめになってかわいそうだったね。」

「チョッキは象さんが着られるほど伸びてしまったけれど、ブランコができて楽しかったでしょう?」

【日本の子どもたちの反応】

文字を習得途中であり、絵で表した子が多い。どんなことをねずみ君に言ってあげたいか聞いた。

「ねずみ君、チョッキが伸びてかわいそうだったね。ぼくが買ってあげるよ。」

「ねずみ君、新しいチョッキを作ってあげたよ。ズボンも作ってあげたからね。」

チョッキとズボンをはいたねずみ君を描いている。

「ブランコ楽しそうだったね。」

この絵本は、どちらの子どもたちも大変興味深く聴いてくれた。ねずみ君に同情したり、何で貸したのって注意してあげたり、新しいのを買ってあげるよ、ブランコ楽しかったね、等とても優しい気持ちになっていた。読み終えたときの子どもたちの優しい表情に、私まで嬉しくなった。「似合うかしら?」と読むと、アメリカではうんうんと同意の反応が多かったが、日本では「似合わない。」と声がし、動物がだんだん大きくなるにつて大きな声になっていった。象の時にはみんなで声を合わせ「似合わない!」と叫んだ。黙って聴くことを重視しているアメリカと、反応を見ながら読んでいる日本との違いだろうか。もっとも私のつたない英語のせいかもしれないが。読んでいて反応が即座に返ってくると嬉しいし、ついついテンションはあがりがちになる。

日本の子どもたちの反応に、ズボンや帽子を被せている絵があった。『ねずみ君のチョッキ』には、『また、ねずみ君のチョッキ』『また、また、ねずみ君のチョッキ』という続き話が出ておりそれを読んだ子が書いたと思われる。

B)「巨大な巨大な」(There was・・ There was・・)

アメリカの子どもたちの前で「巨大な巨大な」と日本語で題を言うと、「キョダイナ、キョダイナ」とついて繰り返す。日本語発音を面白がっているようだ。場面ごとに日本語と英語を交互に読んでいった。石鹸山で滑り台をしている場面とトイレットペーパーのところでは、担任を振り返り顔を見る。担任に聞くと、アメリカではお尻を出している絵をあまり見せないと言うことだった。読んだ後、「どんな巨大なものがあったら楽しいと思う? 作者になって書いてみよう。巨大な巨大な○○があったとさ。子どもが100人やってきて、○○をしたとさ。文章だけでもいいし、絵本のように絵と文で表してもいい。」と言い、白紙を配った。

【子どもたちの反応】

子どもたちが取り上げたもの

	アメリカ	日本
食べ物	ドーナツ・りんご	餅・ケーキ・ゼリー・クリームパン・豆・ブドウ・マヨネーズ
電気製品	ラジオ・オーブン・コンピューター	冷蔵庫・掃除機・洗濯機・コード
乗り物	自転車・車・トラック	電車・車
遊びもの	ボール・滑り台・ローラーコースター・トランポリン・そり・サンドボックス・ゲーム・プール・風船・ベル	ボール・人形
生活用品	歯ブラシ・イス・チョーク・トイレボール・バスタブ・時計	シャンプー・スポンジ・雑巾・コップ・鍋・皿・ベッド・傘・水道・時計
学用品	学校・先生・本	リコーダー・筆箱・鉛筆・筆・黒板
生き物	鯨3・馬・牛・駱駝・蝿	象・カラス
自然	池・木3・松の木2・家・岩・波・火・魚	
その他	旗・悪臭のする靴・悪臭のするソックス・ポケモン・爆弾	旗・打ち出の小槌・魔法のランプ・金庫

【違いが面白かったもの】

食べ物では飽食の日本において子どもたちもグルメなのか、バラエティに富んでいる。餅は日本特有のものである。食べ物については、100人の子どもたちがいっしょに食べるというのがほとんどであったが、餅とマヨネーズは違っていた。

『あったとさ、あったとさ。巨大な巨大な餅がのっぱらにあったとさ。子どもが100人やってきて、餅にひっついたら、べたべたべたとあちこちひっついた。』

『あったとさ、あったとさ。巨大なマヨネーズがあったとさ。子どもが100人やってきて、マヨネーズで巨大な絵を描いたとさ。』と書いている。

電気製品では、日常生活がかいま見える。アメリカでは学校にもコンピューターが整備され、家庭でのオーブンの頻度が高いのが伺われる。

『巨大な巨大なコンピューターがあったとさ。』

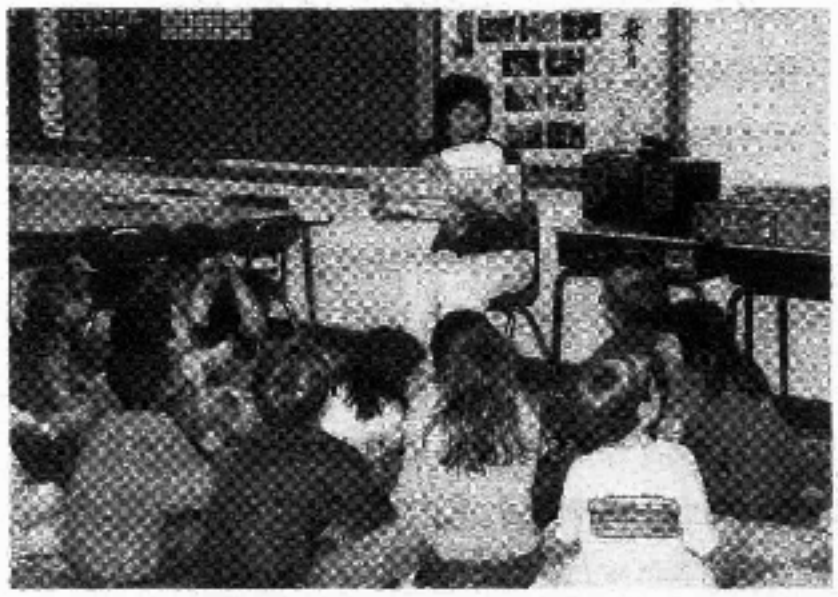
A『子どもが100人やってきて、めちゃくちゃして壊しちゃった。』

B『子どもが100人やってきて、キーの上で飛び跳ねて遊んだ。』

とコンピューターにも2通りあった。

オーブンでは『知らなくて上り、ぱりぱりに焼けちゃった。』と書いたのもあった。

また、日本の子どもたちの取り上げた洗濯機では『中に落ちてグルグルグル。目が回る。』冷蔵庫では、『中で凍ってコチコチだ』。コードでは『一人がくっついて感電し、次々と100人の子どもがくっついた。』狭い日本の家では子どもたちの身の回りにたくさんの電気製品が目に付いているのだろう。どちらにしても電気製品では、焼けたり感電したりと、両国とも殺伐としたイメージを持っている。



遊ぶもので、アメリカの子どもたちは、種類も豊富で比較的大きなものを取り上げて『みんなで遊んだよ。』と言うのが多かった。移動遊園地などがあり、いつも親しんでいるのだろう。しかし、日本の子どもたちが遊びからイメージしたのはボールと人形だけであり、遊びの経験が少ないと思われる。ボールでは、楽しく言葉遊びをしているものがあった。

『あったとさ、あったとさ。ひろぉいのっぱらどまんなか。きょだいなボールがあったとさ。子どもが100人やってきて、ボールをころころ転がした。みんなつぶれてひっついた。そしてまたまたひっついた。ごろごろ　ピタ。ごろごろピタ。ごろごろろろ。』

生活用品の中の雑巾は、学校で掃除をしている日本の子どもたちしか思い浮かばないだろう。巨大な雑巾を滑り台にして、山を滑り降りると言う楽しい発想をしている。

時計は日本とアメリカの子どもたち両方が取り上げている。

アメリカ　『時計の中でかくれんぼ。』

日本　A『誰かがスイッチをおしちゃった。なるよなるよ。リリリリ・・・・みんなはうるさくて耳ふさぐ。』

B『針の上で踊った。時間を自由に変えたとさ。』

C『針にのって遊んだら、世界中昼と夜とがめちゃくちゃだ。』

アメリカの子どもたちは遊びの場としてとらえているが、日本では時間に追われている様子がうかがえる。

学用品では日本では自分が使っているものを取り上げているが、アメリカではあまり出てこない。日本ではすべて家庭で用意し、自分のものという意識があるのだろうか。アメリカでは、色鉛筆やはさみ、のり等ほとんどものもが学校においてありみんなで使っていた。

生き物はアメリカの子どもたちの方が身の回りにいるのだろう、たくさん思い浮かべている。『巨大な鯨に、食べられちゃった。』とか『巨大な蝿を100人の子どもが殺しちゃった。』と書いている。

自然のものは日本の子どもたち誰一人書いていない。それに引き替えアメリカの子どもたちはたくさん思い浮かべている。この地域の松かさは日本のそれの5倍

はありそうなほど大きかったが、木を連想した子どもに松の木を、と限定した子もいた。『また巨大な波がやってきて、100人の子どもを洗ったよ。』と言うのもおもしろかった。日本では豊かな自然に恵まれてはいるが、接する機会が少ないであろうか。

そのほかアメリカで特に面白かったものの中に２人が書いていた、「巨大なくさい靴下」と「巨大なくさい靴」がある。

『くさい靴下に入って歩き回った。あんまり長くいれなくて、飛び出した時には死んじゃった。』

靴『恐ろしくくさい臭いで死滅した。』

１日中運動靴を履いたまま生活をしているので、子どもたちの靴も臭いのだろうか。

また非常にアメリカらしいと思ったのが巨大な旗だ。『巨大な、巨大な旗があったとさ。100人の子どもがアメリカへの忠誠を誓った。』と書いていた。毎朝学級で国家を歌いながら国への忠誠を誓っている国ならではの発想である。

またアメリカではポケモンがブームになっていて、ポケモンの折り紙を教えてヒロインになったほどだが、巨大なポケモンも出てきて、『ポケモンにのって遊んだ』と言うのがあった。

日本では打ち出の小槌・魔法のランプ・金庫がある。

『子どもが100人やってきてゆっさりゆっさり右・左　ざっくざく　ざっくりじゃらじゃら　どんどん出てくるたからの山。』

『魔法のランプを100人でこすったら、かわいい妖精飛び出した。』

また金庫では『子どもが100人やってきて○○○…番押すとドアが開き　お金がどっさどさ。』

これらは、読んでもらったり話してもらったりした絵本の発想である。

絵本の中で、子供たちは豊かな体験をしているのであろう。

子どもたちは想像力豊かである。次々と巨大なものを創造し空想の世界で遊んでいた。アメリカの子どもたちはダイナミックで自然を相手にしている。日本の子どもたちは小さいものを大きく創造し、様子や音を工夫し言葉遊びをしている。どちらにしても焼かれた、殺された、食べられた等マイナスイメージの言葉が出てくるのは現代の世相を象徴しているように思う。

C）りんごが一つ　(There Was An Apple)

先生に名前を呼ばれた子どもから順に私の周りに集まってくる。ほとんどを英語で読む。その後、絵本を見せながら日本語だけで話し動作をしてみせる。終わった後、「誰が出てきたか、その後どうなったか」、の確認してから質問をする。

もしあなたがライオンやウサギだったらどうするか?

「りんご一つぐらいならいいや。」

「やっぱりみんなで分けた方がいいから、怒ると思う。」

赤ちゃんを抱いている猿を見てどう思う。

「お母さん猿だから、許してあげる。」「小猿が早く大きくなるといいね。」など、アメリカの子どもも日本の子どもも、弱いものに対して優しい気持ちを持っている。この優しい気持ちをいつまでも持ち続けて欲しいと願った。パフォーマンスしながらの読み語りは邪道だろうが、子どもたちには受け、黙って聞くよう習慣づけられているアメリカでも笑い声や音真似の反応があった。

D）ももたろう　(Peach Boy MOMOTARO)

英語と日本語で紙芝居をする。その後、一緒に聞いてくれていた日本から同行の多田教諭に「ももたろう」の歌を歌ってもらった。終わってから登場人物と、ストーリーの展開を確認。きび団子について興味を持ったらしく、何から作るのかどんな味か大きさはどうか等質問をしてきた。

【子どもたちの感想】

『話を聞いているとき、ぼくは日本人になったような

気がした。彼女が読むとき、自分が日本の少年になったようできび団子持っているような気になった。』

『日本語は素敵だった。この物語はいい話だった。こんな話を毎日聞いていたい。彼女は世界中ですばらしい女性だ。美しい声でじょうずに読んでくれた。』

『ぼくはアクションが好きなので、最後にアクションのある桃太郎の話が大好きだ。犬や猿、キジが鬼をやっつけるところが好きだ。日本の物語を聞くのは初めてだが、日本語も日本の文字もぼくはきっと忘れないだろう。』

『なぜ桃太郎は、桃の中から生まれてきたの? きび団子も日本の桃太郎も大好きだ。また読んでね。』

『この話は、ぼくを幸せにしてくれた。物語が大変いい話で面白かった。日本語で読んでもらったのも良かった。ありがとう。』

『桃の中に赤ちゃんを見つけるなんてびっくりした。またきび団子を食べると強くなっていろいろな色の鬼をやっつけるなんて。出てくる人がみんな日本語を話すのもびっくりした。日本語は面白い。』

『この話は私を優しい気持ちにしてくれた。日本語は理解できなかったけれど、英語でも話してくれたので気持ちよく聞けた。家に帰ってこの話をしてあげたい。』

【日本の子どもたちの感想（2年生)】

『桃太郎さんよく鬼をやっつけたね。怖くなかったですか。よく頑張ったね。これから大きくなったら何するの?』

『桃太郎さん強いね。みんなで力を合わせるとやる気になりますね。頑張ってください。』

『桃太郎さん、すごいですね。私も仲間に入れて欲しいです。そして鬼ヶ島へ鬼退治に行きたかったです。』

『桃太郎さん本当にいるんですか? もしいるなら遊びに来てください。』

『桃太郎さん何歳ですか?』

『きび団子はおいしかったですか。おばあさんが作ったきび団子私も食べてみたいです。』

アメリカの子どもたちにとって、桃太郎はお話の世界の登場人物でしかなく、この物語が自分をどんな気持にしてくれたかと言うのが多かった。日本の子どもたちにとっては、身近にいる誰かであり、来て欲しい、一緒に食べたいなど、行動を共にしたいという思いが強い。桃太郎に手紙を書いてもらったとき、「返事が来るかなあ?」と聞かれ、「来ると思うよ。」とうっかり言ってしまったために、彼らに会うたびに「桃太郎からの返事はまだ来ない?」と質問され続けている。

E）花さき山（The Mountain Of Blooming Flowers)

先生が英文の物語を児童分コピーしてくださる。ここでは絵本をカラーコピーしたものを一枚ずつめくりながら話をしていった。静かに息を詰めて聞き入っている。話がちょうど終わったとき、テレビ局の取材があり、終盤部分を2度読まされる。

話の中で双子の赤ちゃんの片方がお母さんのおっぱいを飲んでいる場面が切り絵になっている。その場面で子どもたちが下を向いたり、ちょっと困ったような表情をしたり、先生の方を振り返ったりした。アメリカでは、絵本でも乳房がでるような場面を載せていないので、子どもたちにとっては刺激があるのだろう。先生は「アメリカでは乳房を見せるようなことはしません。」と言われた。その後、感想を書いてもらっ

た。

【アメリカの子どもの反応】

『この話を聞きながら自分がその場所にいるような気持になった。とても心温まる話だった。小さい女の子はとても落ち着いていい子だった。絵が本物みたいですばらしかった。』

『心温まる話で、聞いているとき嬉しくなった。本当にエキサイティングな話だった。』

『この話は私の心を動かした。いい話だと思う。』

『この話は本当にありそうだと思う。』

『この中の少女は、他の人に山姥に会ったことは間違いだったと言われたが、そうじゃない。彼女は悪くない。とてもいい少女だと思う。』

『この話は、私の心を動かし、もっと聞いていたいような気持にさせた。彼女はいい人で、 話もすごく良かった。もっとこんな話をして欲しい。』

『すごくいい話だった。とても日本的な絵ですばらしかった。彼女の日本語も静かでミステリアスで良かった。』

『私の心は温かくなり、嬉しくなった。聞いていると日本語は分からないけれど、わかるような気持になった。』

日本の子どもたちは、この話を道徳の時間にとりあげて学んでいる。

『花咲山に咲く花は、優しさから生まれるきれいな心の結晶だと思う。』

『つらいこと切ないことを我慢する心が、きれいな花を咲かせる。それを見ると寂しい気持ちやつらい気持ちも、あぁ、やって良かった。と言う気持になってくると思う。』

『花咲山の話はどこか切なくて、でも優しい素敵なお話だと思う。』

『道徳の時、学んだことは、人は見かけで決めない。見かけより優しい人もいる。この山姥のように怖そうに見えても誰もいじめないし、優しい人がわかる心のきれいな人なのだから。』

『親切に損はない。親切にすれば必ず幸せが帰ってくる。花咲山のように。』

『教室でいいことをしたら、掲示板の花咲山に花を咲かせたことがあります。花が咲いたとき、みんな気持ちが良くなりました。』

この話はそれぞれの心に何かを訴えかけたようだ。アメリカの子どもたちにも日本の子どもたちの心にも流れた温かい感情がどんどん増えていくことを願った。

10年ほど前同じ本を読んで感想を求めたところ、人のために何かをするという行為がすばらしい。きれいなものを見たり感じたりすることが嬉しいし、幸せになる。幸せになったら、自然と人にまた幸せを与えられる。と言った感想が多かった。近年この話に感動しても無償ではなく、自分にどう返るか意識する子どもが多くなったような気がする。

F）かさじぞう (Straw Hats For The Jiso)

国語の教科書２年生に収録されたり、図工の時間にお話の絵として描いたりしている題材である。２年生に絵を描いてもらいそれを持って行き、話をした。子どもたちは優しいおじいさんに興味を持ち、静かに聞いていた。自分の手ぬぐいまで被せてあげたのはすごい、と感動してくれた。

④　現地調査の日程

日　時	場　所	内　容	関係者・関係機関 資料（写真等）
3 /27 (月)	Williamson Elementary School Kids Class 図書室・廊下	 お話を読んでいるところを観察 読書啓発の校内掲示	Williamson Elementary School 1020 Zion Hill Road Bolivia, NC 28422 (910) 754-8661

3 /28 (火)	1年生教室	『ねずみ君のチョッキ』を読んでねずみ君にお手紙を書こう	
	pearents center	地域・保護者のボランティアの為の部屋で活動の状況、配布物を見せてもらう。 ボランティアが機関紙 (PARENTS NEWS) を通して、保護者に読書の大切さ、読ませ方を知らせている。	Parent Facilitator Ada McDonald
	3年生教室	『あったとさ、あったとさ There was There was』を日本語と英語で読み、続き話を考える。	Trocia Padgett
3 /29 (水)	2年生教室	『桃太郎 (momotaro)』 感想文を書く	
	図書室	ピカチュウの折り紙をする	
	5年生教室	『花さき山 (The mountain)』 感想文を書く	
3 /30 (木)	図書室	本の中からベストブックを選ぶ。州から本のリストが来て、各学校で投票をし、本のベスト10を選ぶ。	
	1年生教室	『りんごがひとつ』を英語で読む。その後、動作を交えて日本語だけで読む。	Tina Child
	5年生教室	『かさじぞう』英語と日本語で読む。	

(3) 研究の結果と考察

たくさんの絵本を読んでアメリカと日本の子どもたちの違い、共通性について見てきた。子どもたちは絵本が好きである。いつでもどこでも絵本を読んでもらうのを楽しみにしている。学校において本を読んで聞かせることに大きな違いが見られた。日本では読み聞かせは、国語の時間に含まれるのではなく、朝の会だったり、帰りの会だったり、給食時間だったりすることが多い。国語の時間には一つの題材に対して何時間か取って読解、漢字の習得、文法などを学習していく。しかしアメリカでは、リーディングとスペルの時間と別々に存在し、能力別に学習していた。本を読んで聞かせることはすべての時間に共通して行われていた。国語というものが単独ではなくどの教科においてもなされる。音楽の時間にも読み聞かせをしている場面に出会ったのはそのためだ。

日本ではたいていの場合、読み聞かせは心を養う一つとしてなされ、本を読み聞かせて終わったり、また感想を書いたり絵に表したりすることが多い。しかし、アメリカでは少し事情が違っていた。本を読んで聞かせること自体が学習の一部であり、まず登場人物の確認から入り、あらすじを確認する。それもかなり細か

いステップでなされる。アメリカ版"Momotaro"のテキストをもらったので紹介しよう。

どんなお話だったか

1　おじいさんとおばあさんは何をしていましたか?
2　近くの島の人食いがやってきて何をしましたか
3　ももたろうは2つのものを持って旅に出ましたが何でしたか? 彼はどのようにそれを使いましたか?
4　ももたろうと一緒に行った動物の名前と、それぞれどのようにして鬼と戦ったか
5　ももたろはどんな人だと思いますか

次はどうしたか

1　おじいさんが桃を半分に切ろうとしたら
2　ももたろうの住んでいるところに来た鬼は
3　ももたろうが道ばたで休んでいて犬を見た
4　鬼の大将をももたろうが縛り付けた
5　ももたろうが宝物を持って家に帰ったら

次のことに答えなさい

1　いつ、ももたろうは鬼をやっつけましたか
2　いつ、ももたろうは宝と一緒に帰ってきましたか

話をする前に登場人物を確認したり、後から行動を確認したり、いつもこういった方法で本を読んでいるそうだ。その背景には異なる文化を持った子どもたちが一緒に学んでいることがある。経験の異なる子どもたちに同じ土台をもたせ、理解の助けになるようにそうしている。とにかく細かいステップで質問がなされていた。以前きび団子と言えば、だいたいの子どもはそれが何であるかわかっていたが、近年日本においても子どもたちの経験に差が開きつつあるのは確かだ。

子どもたちの反応で大きく異なることはない。特に低学年においては、物語の中に同化し一緒に楽しんでいる。高学年になるとアメリカの子どもたちは話を聞いて、自分にとってどうだったか、気持ちよくさせてくれる話だった、と言う感想が多く、私もこうしたいという言葉はなかった。日本の子どもたちは、こうしたらいいとか、こうなりたいとか行った感想がある。道徳教育の影響かもしれない。

また、物語の中の行為に対して感想を述べていることが多く、日本ではその個人に対してあなたはどうだったかと言う感想がある。

アメリカでは、今している学習に関係すること、主題に関わること、子どもたちの興味関心あること、教えたい文字の手助けとなるようなもの等から読む本を選んでいるそうだ。私は子どもの興味関心を中心に本を選んでいるような気がする。

子どもは子ども、みんな絵本大好き、1人1人の心に温かい感情が流れたことは確かである。

(4)　今後の展望

今回、日本の作家の話を持っていき読み聞かせをしたが、アメリカの教師と連携を取りながら、次はアメリカの話を日本でできたらいいと思う。テーマを絞って交流できたら楽しい。また子どもたちが物語を中心に感想を交換したり、劇にしてビデオ交換したり出来たら面白いと思う。私のテーマはこれで終わるが、今後このテーマに興味を持った教師が発展させてコンタクトを取りながら進めて欲しいと願っている。また読み聞かせのボランティアグループが市内にたくさんある。それらの人を巻き込んで交流してもまた違った交流が出来るのではないか。

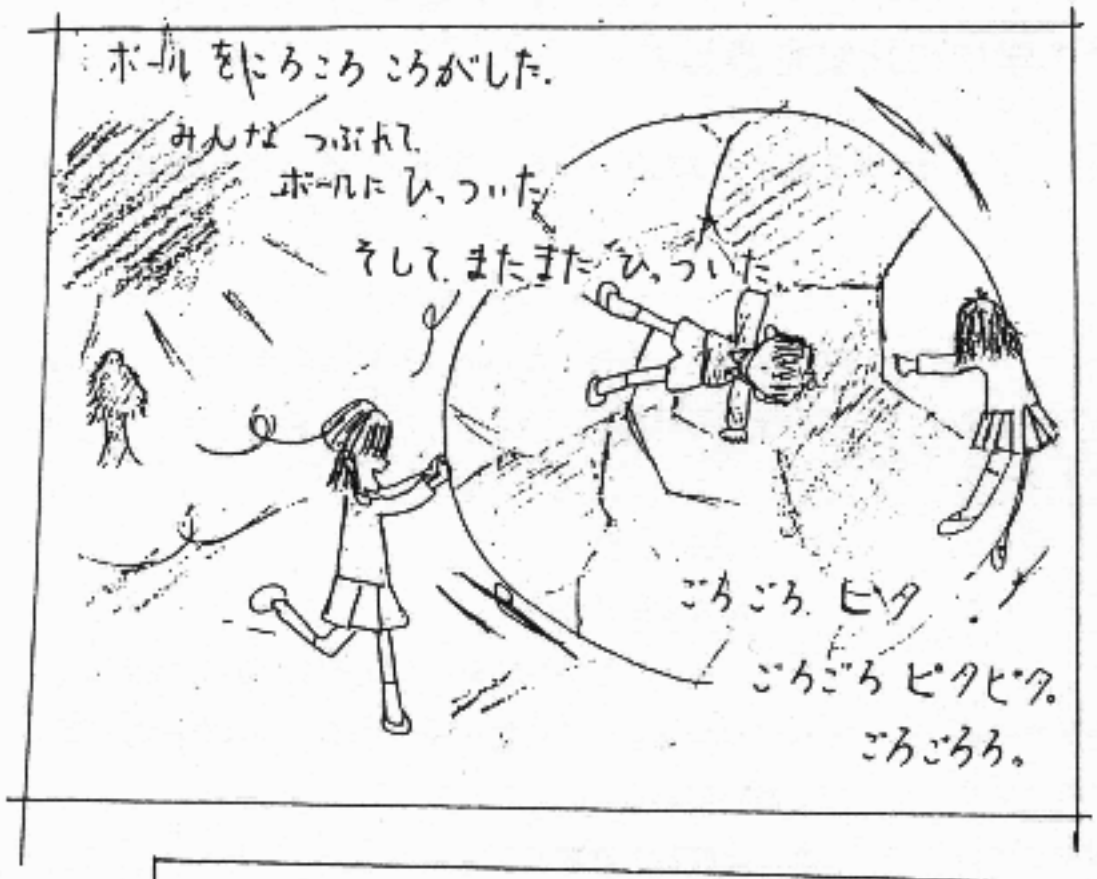
今後、インターネット、ビデオ、手紙を使って子ども間交流、地域にも交流の希望者を募って家族ぐるみでの交流、姉妹校として学校間交流ができるよう働きかけていきたい。

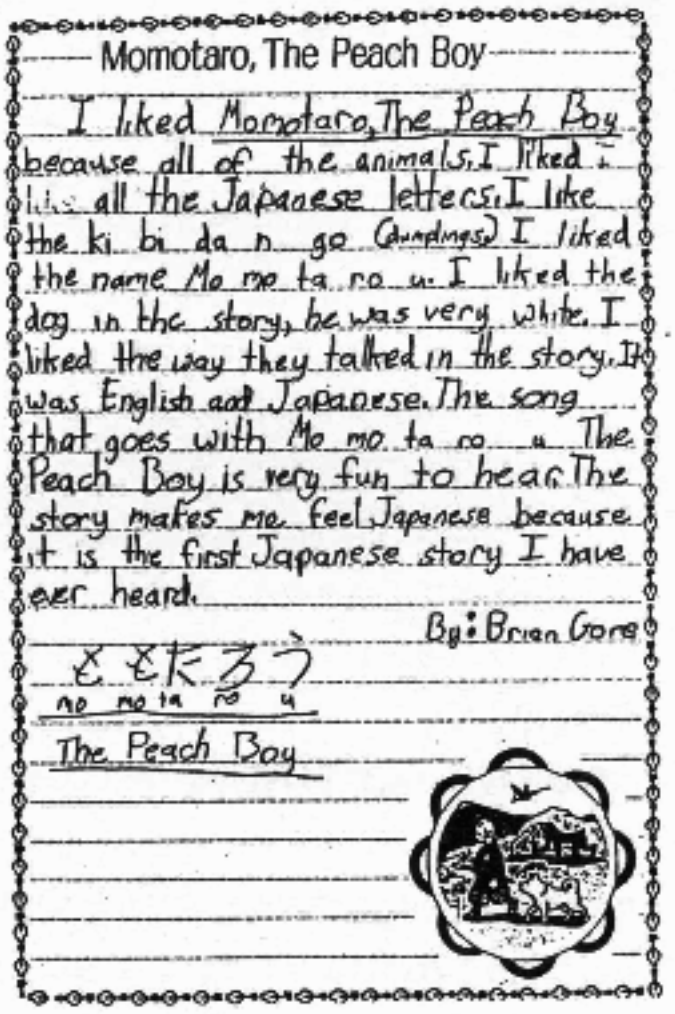
(5)　おわりに

肌でアメリカの学校を感じることができた。いろいろな知識として知っていたことは単なる知識でしかなく、文字や映像での理解であった。今回実際に行ってみて知識がいかにいい加減であったか、理解がいかに薄っぺらいものであったかがわかった。一つの学校という空気の中で、同業者である教師と行動を一緒にしながらたくさんのことを学ばせてもらった。そこにはたくさんの共通点があった。また、今までと違った視点をもてたことも有意義であった。これから21世紀に生きようとする子どもたち、まず教師が学ぶ、国境を越えることが大切だと思う。私たち教師が世界市民であるという意識をもつ努力をしていきたい。

このような機会を与えられてことに感謝をして……

(6) 子どもたちの感想から



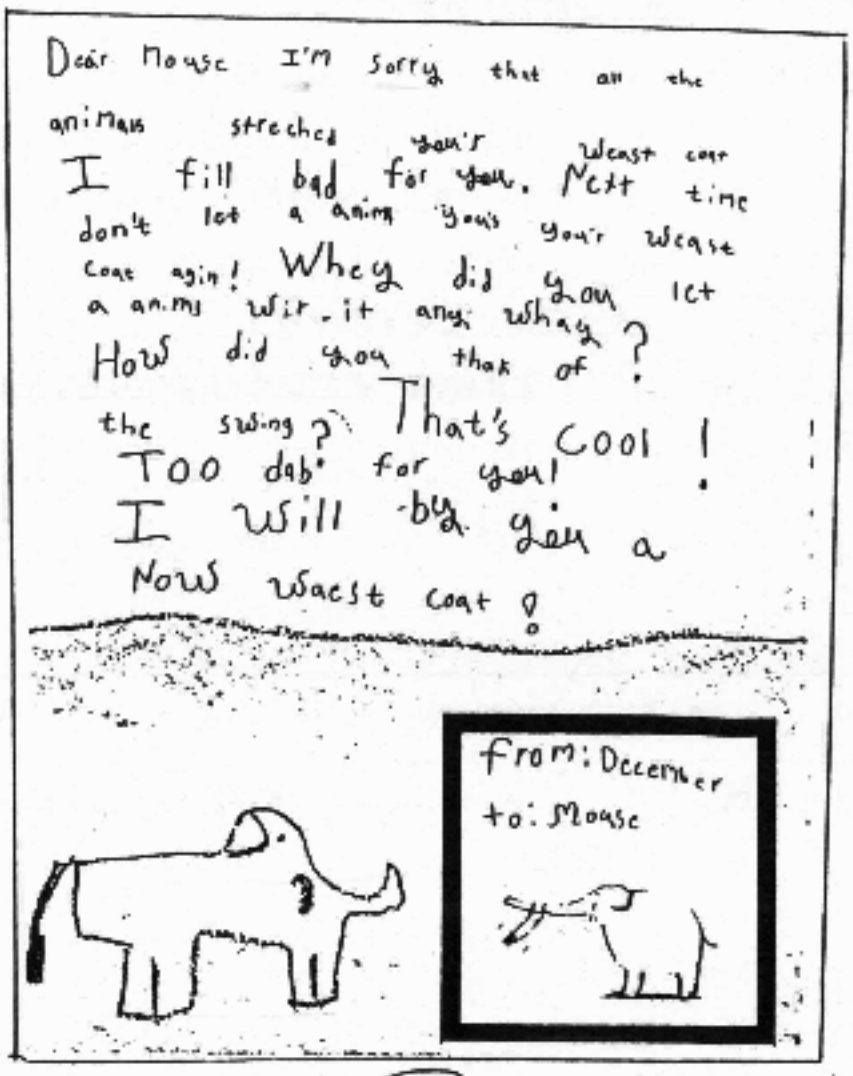


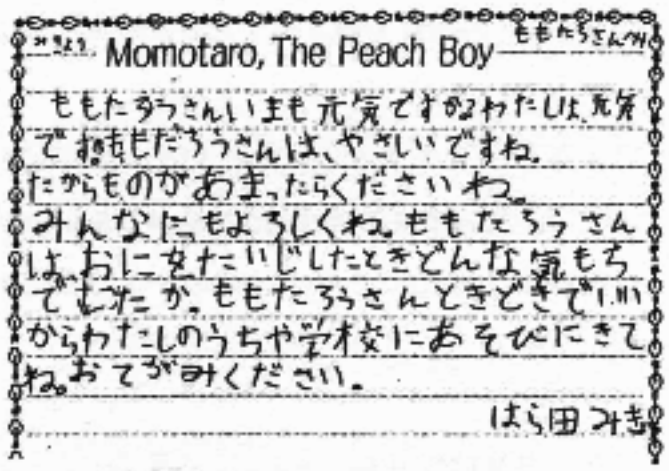
Momotaro, The Peach Boy

I liked Momotaro, The Peach Boy because all of the animals. I liked the all the Japanese letters. I like the ki bi da n go (Dumplings) I liked the name Mo mo ta ro u. I liked the dog in the story, he was very white. I liked the way they talked in the story. It was English and Japanese. The song that goes with Mo mo ta ro u The Peach Boy is very fun to hear. The story makes me feel Japanese because it is the first Japanese story I have ever heard.

By: Brian Gore

ももたろう
mo mo ta ro u
The Peach Boy

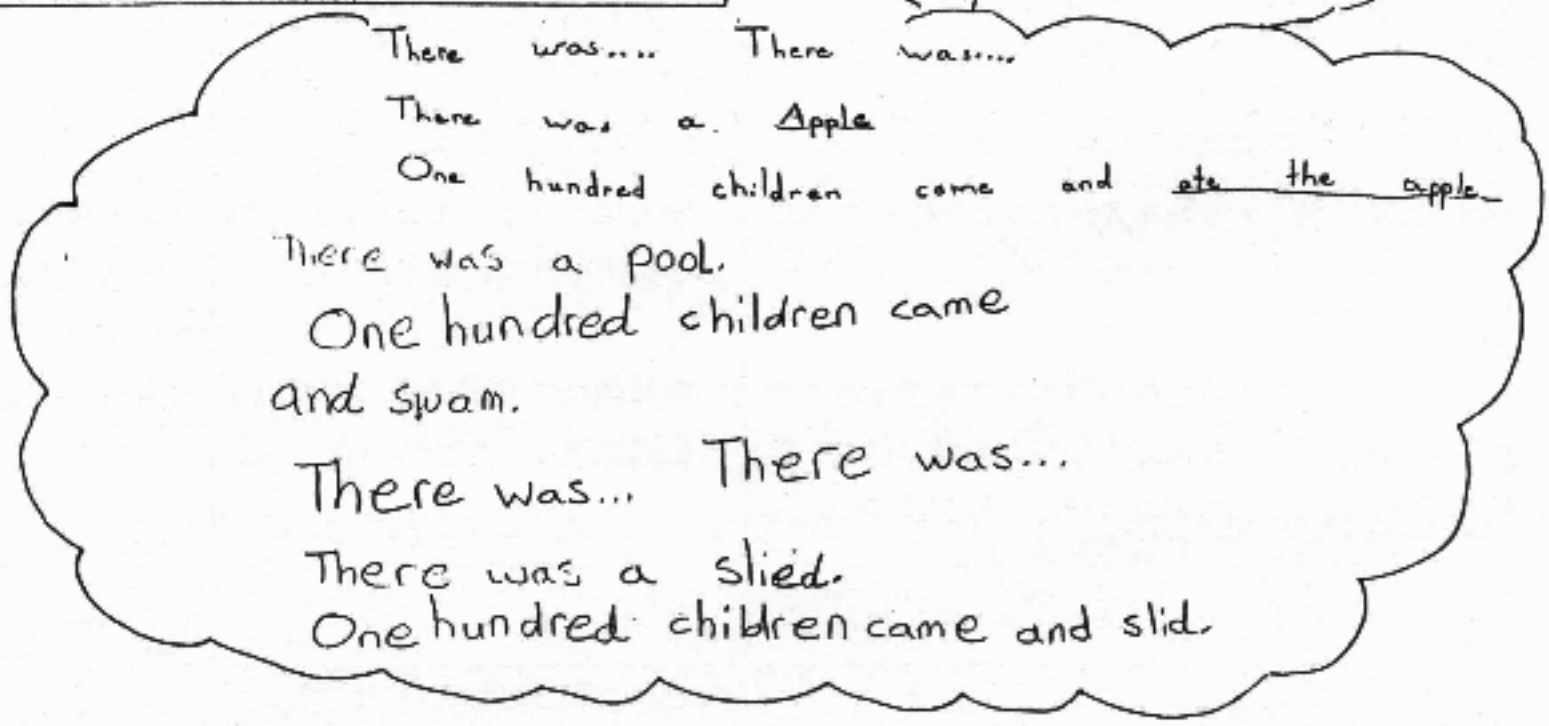




Momotaro, The Peach Boy

ももたろうさんいまも元気ですかわたしは元気でももたろうさんは、やさいですね。たからものがあまったらくださいね。みんなにもよろしくね。ももたろうさんはおにをたいじしたときどんな気もちでしたか。ももたろうさんときどきでいいからわたしのうちや学校にあそびにきてね。おてがみください。

はら田 みき



There was... There was...
There was a Apple
One hundred children come and ate the apple.
There was a pool.
One hundred children came and swam.
There was... There was...
There was a slied.
One hundred chiblren came and slid.